



植草学園大学（発達教育学部・保健医療学部・看護学部）

インクルーシブ社会創成センター TEL 043-239-2624
〒264-0007 千葉県若葉区小倉町1639番3 TEL 043-233-9031 (代表)

インクルーシブ社会創成センターが 誕生しました

植草学園大学副学長／インクルーシブ社会創成センター長 野澤 和弘



教室から飛び出す、学校に行くのを嫌がる、スカートをはきたくないという女の子……。[クラスの3分の1くらいはそんな特性があります]。昨年春に植草学園大学を卒業し、千葉県内の小学校で先生をしているOBの話です。ずいぶん大変な学校に配属されたのだなあと言ったら、「うちの学校でもそのくらいはいますよ」と別のOBに言われました。

新型コロナウイルスで自粛を強いられた影響とも言われますが、それだけではありません。知的障害者は2006年に45万人だったのが、25年には126万人と3倍近くにも増えています（障害者白書）。通常学級で発達障害があると思われる児童・生徒は12年に6.5%だったのが、22年には8.8%になりました（文部科学省調査）。適応障害や依存症などメンタルの問題を持つ人、医療ケア児も増えています。日本で暮らす外国人は24年に36万人増と過去最多になり、LGBTQなど性的少数者も顕在化するようになりました。

社会の多様性は勢いを増して進んでおり、学校にもその波が押し寄せているのです。

しかし、悲観ばかりすることはありません。経済産業省は発達障害の優れた特性を企業活動に取り込んでイノベーションを起こすため「ニューロ・ダイバーシティ」の施策を掲げています。日本の知的障害や精神障害の人の芸術作品は海外で高い評価を得ており、文化庁と厚生労働省は障害者の文化芸術の振興策を進めています。

大学も変わらねばなりません。植草学園大学は旧来の特別支援教育研究センターを改変し、新たにインクルーシブ社会創成センターを設立しました。「インクルーシブ教育」という大学の創設以来の理念をさらに進化させ広めていくための研修や事業を行います。また、教育だけでなく、保健医療や看護をはじめ、文化芸術やスポーツなど様々な分野・領域でインクルーシブの理念を広め、やさしく魅力のある社会の創造に寄与する活動を展開します。

インクルーシブ社会とはさまざまな特性や背景を持った人たちがお互いの存在を尊重し、安心と信頼を実感できる社会のことです。多様性に富んだ新しい社会に貢献できる人材を育成していきたいと思います。

2025年度

インクルーシブ社会創成センターの 活動報告

通級指導教室・特別支援学級新担任研修会（4月・8月）

4月から何をどうすればいいのだろう？」という新任の先生方の不安に少しでも応えるべく、平成 27（2015 年度に千葉県・千葉市教育委員会と連携して「通級指導教室・特別支援学級新担任研修会」を開講しました。4月第一土曜日にこだわって開講し11回目になり、今年度は発達障害、言語障害あわせて60名の先生方の参加がありました。また、本研修会のフォローも兼ねて、夏期休業期間中には「オンデマンド特別支援教育講座 2025」を開講しました。「自閉症・情緒障害特別支援学級」「問題行動の理解と支援」「合理的配慮」「知的障害教育」「インクルーシブ保育」等をテーマにした8講座を開講しました。のべ195名の参加がありました。（佐藤慎二）

バリアフリー演劇鑑賞会『Touch ～孤独から愛へ』開催（6月）



千葉県主催、千葉県障害者芸術文化活動支援センターうみのもり企画、東京演劇集団風による「Touch ～孤独から愛へ」の公演が6月8日に行われました。バリアフリー演劇とはあらゆる人が楽しめるよう舞台手話通訳や字幕、ライブ音声ガイドを組み込んだ演劇のこと。当日は200名を超える観客が来場されました。公演前のバック・ステージツアーでは多くの観客が舞台に上がって小道具を見学しました。舞台にはスロープが設置されており車いす

すユーザーの方が舞台見学される姿も見られました。舞台手話、音声ガイド、字幕が自然に溶け込み、物語が進むにつれどんどん舞台の世界に引き込まれました。前日準備から当日の運営スタッフとして50名を超える本学の学生ボランティアが参加しました。（相磯友子）

うみのもりアート・ワークショップ（6月・7月）

千葉県障害者文化芸術支援センター「うみのもり」と連携し、海の日（7月第3月曜日）に植草学園大学でワークショップ等を開いています。2025年は東京学芸大の花澤洋太教授と3人の学生が特別支援学校でのアート活動について講義、私（野澤）が障害者アートの国内外の状況について話しました。千葉県内だけでなく全国各地から教育や福祉関係者らがたくさん参加してくれました。それ以前には広い教室を使って参加者みんなで色とりどりのアート作品を作る活動も行っており、植草学園の学生たちも顔や手を絵具だらけにして楽しみました。（野澤和弘）



第7回 植草学園 理事長杯争奪戦千葉県特別支援学校 ボッチャ選手権大会を開催(10月)



今年度も、植草学園理事長杯争奪戦千葉県特別支援学校ボッチャ選手権大会を開催しました。本大会は平成 29 年から開催し、今年で第 7 回を迎えました。

今回の大会では、県立船橋夏見特別支援学校から「船橋夏見 A チーム」と「船橋夏見 B チーム」、県立千葉特別支援学校から「チームもっくん」、本学発達教育学部の学生チームの合計 4 チームで競い合いました。どの試合も熱戦が繰り広げられ、「船橋夏見 B チーム」が昨年度に続き、連覇を果たしました。

この大会では、発達教育学部の学生が、ボランティアで準備から当日の運営、各試合の審判などの役割を担いました。本大会を通じて、皆様に親しまれるパラスポーツの発展と地域貢献の一助になればと思います。(高瀬浩司)

2025 植草学園大学特別支援教育講座 「高等学校における通級による指導」

12月6日に、2025植草学園大学特別支援教育講座を開催しました。今回は、「高等学校等における通級による指導の推進と学校現場への期待 ―福井県立武生高等学校における通級による指導の実践から―」をテーマに、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官の近藤修史氏から解説・提言を、福井県立武生高等学校定時制の山下久美子先生から校内外の連携による通級による指導の実践のご報告をいただきました。当日は、オンラインで110名の皆様にご参加いただき、質問が絶えないほど熱量の高い講座となり関心の高さを実感しました。

以下、参加された皆様からの感想を一部ご紹介します。

- ・高等学校における通級による指導の在り方や最新の動向等を分かりやすく解説していただき、今後、現場でもそれらを実現させていけるよう頑張っていきたいと思いました。
- ・高等学校の通級の実践をたくさん紹介して頂き、ありがとうございました。校内で通級での取り組みを理解していただくことが大切なのだと思います。

平成 30 年度から制度化された高等学校における通級による指導のニーズは年々高まっており、各学校や地域の実態を踏まえた効果的な実施及び運用が求められています。より一層のインクルーシブ教育システムの充実に向けて、引き続き皆様と共に、子どもたち一人ひとりの教育的ニーズに応じた質の高い特別支援教育の在り方を深めていきたいと思っています。(高瀬浩司)

インクルーシブ社会創成センターの設立に寄せて

保健医療学部教授 百田 貴洋



本センターは、このたび「インクルーシブ社会創成センター」として新たな歩みを始めました。私も作業療法専攻の教員として本事業に関わらせていただくこととなりました。インクルーシブ社会の実現には、教育・行政・医療・福祉・企業など多領域の連携が不可欠です。近年、作業療法士が幼稚園・保育園や小学校といった学びと育ちの場に関わる動きが広がりつつあり、欧米ではすでに作業療法士の約4分の1が教育現場で活躍しています。私自身も子どもたちの現場に関わる機会が増える中、この転換期に本センターに携われることにご縁を感じています。今後も明るい未来の創成に向け、微力ながら尽力してまいります。

インクルーシブ社会の実現にむけた看護学部の役割

看護学部教授 林 ひろみ



看護学部が植草学園大学の3つ目の学部として令和7年に開学いたしました。看護学部ではあらゆる人々に対し、その人らしい暮らしを続けていけるための地域共生社会の実現に向けて、貢献できる看護師・保健師の育成を目指しています。

私は看護学部で母性看護学を教授しており、助産師でもあります。超少子化の現代において、育てにくさを感じている親の存在は少なくはありません。誰しものが安心して子育てできる社会を目指していくことが求められています。様々な境遇にある子どもと親がおかれている状況や環境を踏まえ、希望やニーズに寄り添い、その人らしい暮らしの実現にむけた支援の在り方について学生とともに探究するとともに、皆様方へ発信していけるよう頑張りたいと思います。

出版物のご紹介

日本のインクルーシブ教育とは（ぶどう社）

植草学園大学・短大の教員らが note という SNS で連載している「インクル♡教育（社会）」が本になりました。2025 年 3 月に出版された「日本のインクルーシブ教育とは」（ぶどう社）です。

国連障害者権利委員会は日本の「分離教育」をやめるよう勧告していますが、現実には特別支援学校を希望する児童生徒は増え続けており、どこも教室が足りない状況です。特別支援学級に通う児童生徒の数はさらに増えています。それはなぜなのでしょう。植草学園大学には特別支援学校で障害のある児童や生徒に教えていた先生が何人もいます。自らの経験を振り返りながら、日本のインクルーシブ教育の歴史や今後のあり方を語りました。（野澤和弘）

